



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	ウチナーンチュとバスク人のアイデンティティ意識について
Author(s)	浜崎, 盛康
Citation	移民研究 = Immigration Studies(12): 99-114
Issue Date	2016-10
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36891
Rights	

ウチナンチュとバスク人のアイデンティティ意識について

浜崎盛康

- I. はじめに
- II. ウチナンチュあるいはバスク（系）人であるという意識について
- III. ウチナグチあるいはバスク語に対する思い
- IV. 宗教的意識について
- V. 考察

I. はじめに

本稿の目的は、ウチナンチュとバスク人のアイデンティティ意識を、次の3つの観点から比較検討することである。すなわち、「I. ウチナンチュあるいはバスク（系）人であるという意識について」、「II. ウチナグチあるいはバスク語に対する意識について」、「III. 宗教的意識」の観点から、本プロジェクトのメンバーによるアルゼンチンのバスク（系）人に対するアンケート調査¹⁾（以下、本プロジェクト調査）と、琉球新報社による「沖縄県民意識調査2011²⁾」（以下、琉球新報社調査）、及び Institut culturel basque（バスク文化研究所）による *Identité et culture basques au début du XXIème siècle*³⁾（21世紀初頭におけるバスク人のアイデンティティと文化）（以下、バスク文化研究所調査）を適宜比較検討して、ウチナンチュとバスク人のアイデンティティについて、限られた観点からの限定的なものではあるが考察を行いたい。

II. ウチナンチュあるいはバスク（系）人であるという意識について

1. ウチナンチュあるいはバスク（系）人であることについて

ウチナンチュとバスク人のアイデンティティについて検討するに当たって、まず確認したいのは、ウチナンチュはウチナンチュであることをどう思い、またバスク（系）人はバスク（系）人であることをどう思っているのかという点である。この点については、琉球新報社もアンケートで調査しており、また本プロジェクトも同様に調査している。以下、それぞれ見てみたい。

ウチナンチュに関しては、琉球新報社の調査が「あなたは沖縄人であることを誇りに思いますか」という質問（Q14）を行っている。結果は表1の通り、「とても誇りに思う」が55.8%、「まあ誇りに思う」が33.5%、「あまり誇りに思わない」が2.8%、「まったく誇りに思わない」が0.5%、「どちらでもない」が6.1%であり、「分からない」が1.3%である。また、アルゼンチンのバスク（系）人（102人）の場合は「バスク（系）人であるこ

表1 沖縄人であることの誇りに思う
(琉球新報社調査 Q14) (%)

回答項目	総計 (1,075人)
とても誇りに思う	55.8
まあ誇りに思う	33.5
あまり誇りに思わない	2.8
まったく誇りに思わない	0.5
どちらでもない	6.1
分からない	1.3

表2 バスク(系)人であることの誇りに思う
(アルゼンチン・バスク (102人) 本プロジェクト調査 1-3)

回答項目	人数 (割合%)
とてもそう思う	87人 (85.3)
ややそう思う	11人 (10.8)
どちらとも言えない	4人 (3.9)
あまりそう思わない	0人 (0.0)
全くそう思わない	0人 (0.0)

とを誇りに思う。」(Me siento orgullos/a de ser vasco/a)かどうかという質問(本プロジェクト調査1-3。邦訳も本プロジェクト調査による(以下同様))に対して、表2の通り「とてもそう思う」(Totalmente de acuerdo)が85.3%、「ややそう思う」(bastante de acuerdo)が10.8%、「どちらとも言えない」(indiferente)が3.9%、「あまりそう思わない」(No muy de acuerdo)が0%、「全くそう思わない」(En desacuerdo)が0%である。

ウチナーンチュは肯定的な回答(「とても誇りに思う」と「まあ誇りに思う」)の割合の合計が89.3%であり、アルゼンチンに住むバスク(系)人は肯定的な回答(「とてもそう思う」と「ややそう思う」)の割合の合計が96.1%であって、共に高い。一方否定的な回答は、ウチナーンチュでは3.3%(「あまり誇りに思わない」と「まったく誇りに思わない」)の割合の合計)であり、アルゼンチンに住むバスク(系)人では0%(「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」)の割合の合計)である。沖縄に住むウチナーンチュとアルゼンチンに住むバスク(系)人の比較であることは踏まえなければならないが⁴⁾、アルゼンチンに住むバスク(系)人はウチナーンチュよりも、肯定的な回答の割合がやや高く、否定的な回答はアルゼンチンに住むバスク(系)人は0人で、ウチナーンチュでは少し見られる。

表3 「空手・琉舞・工芸など沖縄の文化，芸能を誇りに思いますか。」
（琉球新報社調査 Q20）（%）

回答項目	総計（1,137人）
とても誇りに思う	67.1
まあ誇りに思う	27.0
あまり誇りに思わない	2.0
まったく誇りに思わない	0.4
分からない	3.4

表4 バスクのスポーツ・文化・芸能に対して
（アルゼンチン・バスク（105人）（本プロジェクト調査 1-4））

回答項目	総計（105人）（割合%）
とてもそう思う	88人（83.8）
ややそう思う	15人（14.3）
どちらとも言えない	2人（1.9）
あまりそう思わない	0人（0.0）
全くそう思わない	0人（0.0）

2. 沖縄あるいはバスクの文化・芸能について

では次に、沖縄とバスクの文化・芸能・スポーツについて、ウチナーンチュとアルゼンチンのバスク（系）人は、それぞれどのような思いを持っているか検討したい。

「空手・琉舞・工芸など沖縄の文化，芸能を誇りに思いますか。」という質問（琉球新報社調査 Q20）に対して、結果は表3の通り、「とても誇りに思う」が67.1%、「まあ誇りに思う」が27.0%、「あまり誇りに思わない」が2.0%、「まったく誇りに思わない」が0.4%であり、「分からない」が3.4%である。アルゼンチン・バスク（105人）の人たちの場合は、「バスクスポーツ・舞踏・ベルチョなどの文化・芸能を誇りに思う。」（*Me siento orgullos/a de la cultura y el arte vascos, tales como los deportes tradicionales, las danzas y la musica.*）かどうかという質問（本プロジェクト調査 1-4）に対して、表4の通り、「とてもそう思う」（*Totalmente de acuerdo*）が83.8%、「ややそう思う（*bastante de acuerdo*）」が14.3%、「どちらとも言えない」（*indiferente*）が1.9%、「あまりそう思わない」（*No muy de acuerdo*）が0.0%、「全くそう思わない」（*En desacuerdo*）が0.0%である。

ウチナーンチュでは肯定的な回答（「とても誇りに思う」と「まあ誇りに思う」）の割合の合計が94.1%であり、アルゼンチンに住むバスク（系）人では肯定的な回答（「とてもそう思う」と「ややそう思う」）の割合の合計が98.1%であって、共に高い。一方否定的

な回答（「あまり誇りに思わない」と「まったく誇りに思わない」の割合の合計）の割合は、ウチナーンチュでは2.4%であり、アルゼンチンに住むバスク（系）人では0.0%（「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の割合の合計）であり、ウチナーンチュの場合もかなり低いが、アルゼンチンに住むバスク（系）人の場合は0.0%である。ウチナーンチュは、沖縄の「空手・琉舞・工芸など沖縄の文化、芸能」に対して95%近くの人が肯定的であり、否定的な人は2.4%とごくわずかであり、アルゼンチンに住むバスク（系）人は、「バスクのスポーツ・文化・芸能」に対して100%近くの人が肯定的で（98.1%）、否定的な人は全くいない。ウチナーンチュもアルゼンチンに住むバスク（系）人も、自らの「文化・芸能（やスポーツ）」に対して肯定的である。

3. バスク人の要件・条件

沖縄県の人口は周知の通り、全国の動向とは対照的に増加の一途をたどっている。沖縄県によれば（http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/estimates/estimates_suikei.html）、平成28年（2016年）3月1日現在の推計人口は1,433,181人である。平成12年（2000年）の人口が、1,318,220人であり、その増加ぶりは著しい。増加の原因の一つとして、一般に移住者の増加が挙げられている。このように移住者が増えることによって、ウチナーンチュとは誰か（何か）があらためて問われてきているように思われる。既出の琉球新報社の『沖縄県民意識調査報告書2011』でも、「はしがき」で、「ウチナーンチュ（沖縄人）とは何か」と問いながら、「本土からの移住者は増えるなど、単純に「県民」＝「ウチナーンチュ」ではくくれない側面も出てきている。」としている。

バスク（系）人の場合も、全く同様の問題を抱えている。ウチナーンチュに関しては、明確にウチナーンチュであるための要件は琉球新報の調査では問われていない。しかし、参考までに、バスク（系）人の場合について、本プロジェクト調査とバスク文化研究所が調査しているので、見ておきたい。

表5の通り、本プロジェクト調査では「あなたが考えるバスク人の要件とは何ですか。以下の選択肢の中から、強く感じる順番に3つ選んで、右の回答欄に番号をお書きください。」（¿Qué condiciones se deben reunir para ser considerado «vasco/a»? Elija tres opciones y escriba los números, en orden de prioridad, en el espacio de la derecha.）（アルゼンチン・バスク（本プロジェクト調査4-1）総計100人）という質問で行われている。

バスク研究所の調査でも、「自分がバスク人であると感じるために最も重要な条件は何だとあなたは思いますか。2つ挙げてください。」（Selon vous, quelles sont les deux conditions les plus importantes pour qu'une personne se sente basque ?）というほぼ同様の質問が、表6の通り、行われている。この項目の見出しは「3.1.2.1.3 バスクアイデンティティ

表5 バスク人の要件

（アルゼンチン・バスク（本プロジェクト調査4-1）総計100人）

回答項目	1位	2位	3位	合計	同意率	重みづけ
①先祖がバスク人であること	48	7	14	69	69.0	172
②出自がバスク地方であること	7	5	1	13	13.0	32
③バスク地方に住んでいること	2	3	1	6	6.0	13
④バスク語を理解すること	3	11	11	25	25.0	42
⑤バスクの伝統文化や習俗を実践していること	21	40	14	75	75.0	157
⑥バスクの屋号や名字を持っていること	6	9	22	37	37.0	58
⑦自分がバスク人であると思うこと	23	16	25	64	64.0	126
⑧その他	1	0	5	6	6.0	8

表6 バスク人であると感じるための最も重要な条件

（スペイン・フランスバスク（バスク文化研究所調査3.1.2.1.3）（%）

単位:%

回答項目	同意率
バスク人であろうと望むこと	42
バスク地方（国）で生き、働くこと	41
バスク地方（国）の生まれであること	39
バスク語を話すこと	17
バスク地方（国）の支持者（防御者）であること	16
バスク人の先祖を持っていること	9
バスクの名前を持っていること	4
バスクの芸術等を実践していること（踊り、音楽...）	1
バスクのスポーツや競技を実践したり関心を持つこと	1
その他の条件	3
Nsp/nrp	4

の構成要素」(Les composantes de l'identité basque) である。この質問に対する回答は、「バスク人であろうと望むこと」(Vouloir être basque) が42%、「バスク地方(国)で生き、働くこと」(Vie et travail au Pays Basque) が41%、「バスク地方(国)の生まれであること」(Etre né au Pays Basque) が39%、「バスク語を話すこと」(Parler basque) が17%、「バスク地方(国)の支持者(防御者)であること⁵⁾」(Etre défenseur du Pays Basque) が16%、「バスク人の先祖を持っていること」(Avoir des ancêtres basques) が9%、「バスクの名前を持っていること」(Avoir un nom basque) が4%、「バスクの芸術等を実践していること(踊り、音楽...)

」(Pratiquer des arts basques(danse,musique...))が1%,「バスクのスポーツや競技を実践したり関心を持つこと」(Pratiquer ou suivre un sport ou un jeu basque)が1%,「その他の条件」(Autre condition)が3%である。

本プロジェクト調査においては、「バスク人の要件」は「祖先がバスク人であること」が重み付けで172と一番高い値を示しており、「バスクの伝統文化や習俗を実践していること」が157,「自分がバスク人であると思うこと」が126と続いている。バスク文化研究所調査では、「バスク人であろうと望むこと」が42%と一番高い割合を示しており、以下「バスク地方(国)で生き、働くこと」が41%,「バスク地方(国)の生まれであること」が39%と続いている。アルゼンチンのバスク(系)の人たちにとって、出自(祖先がバスク人)が最も重要であり(海外のバスク(系)の人々にとって当然のことであるとも言えよう)、スペインとフランスのバスクの人たちにとっても、生まれは3位とやはり重視されている。しかし、バスク人であると思う(バスク人であることを望む)が、アルゼンチンのバスク(系)の人たちにとって2位であり、スペインとフランスのバスクの人たちにとっても1位であり、結局のところバスク人である(あろう)と思うことに収斂されていくようにも思われる。これは、『現代バスクを知るための50章⁶⁾』において、「今日では、バスク人とは「自らをバスク人だと意識している者」だ、といったような主意的な定義づけが主流である。」(p.33)と述べられていることとも、符合するものである。

Ⅲ. ウチナーグチあるいはバスク語に対する思い

1. ウチナーグチとバスク語に対する愛着

言語とアイデンティティの関係も重要である。琉球新報の調査では、「あなたは、方言についてどう思いますか。」という質問(Q17)に対して、結果は表7の通り、「愛着がある」が45.9%,「どちらかといえば愛着がある」が42.5%,「どちらかといえば恥ずかしい」が1.5%,「恥ずかしい」が0.3%,「分からない」が9.9%である。本プロジェクト調査では、アルゼンチンに住むバスク(系)の人の場合、「バスク語(バスク方言)に愛着がある」(Siento apego hacia el euskara(cualquier variedad de la lengua vasca))かという質問(1-1)に対して、結果は表8の通り、「とてもそう思う」(Totalmente de acuerdo)が61.5%(64人),「ややそう思う」(bastante de acuerdo)が28.8%(30人),「どちらとも言えない」(indiferente)が6.7%(7人),「あまりそう思わない」(No muy de acuerdo)が1.9%(2人),「全くそう思わない」(En desacuerdo)が1.0%(1人)である。

ウチナーンチュの場合、方言に対する肯定的な意見(愛着あり)('愛着がある'と'どちらかといえば愛着がある'の合計)は88.4%であり、否定的な意見('どちらかといえば恥ずかしい'と'恥ずかしい'の合計)は1.8%である。アルゼンチンに住むバスク(系)

表7 「あなたは、方言についてどう思いますか。」
（琉球新報調査 Q17）

回答項目	総計（1,137人）
愛着がある	45.9
どちらかといえば愛着がある	42.5
どちらかといえば恥ずかしい	1.5
恥ずかしい	0.3
分からない	9.9

表8 「バスク語（バスク方言）に愛着がある。」
（本プロジェクト調査 1-1）

回答項目	総計（104人）
とてもそう思う	64人 61.5%
ややそう思う	30人 28.8%
どちらとも言えない	7人 6.7%
あまりそう思わない	2人 1.9%
全くそう思わない	1人 1.0%

の人の場合、バスク語（バスク方言）に対して肯定的な意見（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計）は、90.3%であり、否定的な意見（「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の合計）は2.9%である。

ウチナーンチュの場合もアルゼンチンに住むバスク（系）の人の場合も、ともに自らの言語（方言）に対しては90%前後の人が肯定的であり、高い愛着度を示している。それに対して否定的な意見は1.8%と2.9%であり、愛着を持っていない人の割合は低い。ただ、ウチナーンチュの場合、「分からない」が9.9%おり、分からないとする理由はウチナーンチュの複雑な思いが反映されている可能性も考えられ、さらに調査の必要があるように思われる。

2. ウチナーグチとバスク語の子供たちへの継承

ウチナーンチュもバスク（系）人も、それぞれウチナーグチとバスク語に対して、III -1 で見たように、肯定的（愛着がある）な意見が大多数である。では、それぞれの言語の継承について、つまり子供たちにそれぞれの言語を使えるようになってほしいかどうかについては、どうだろうか。琉球新報社調査とバスク研究所調査において、この点が質問項目となっている。

琉球新報の調査では、「子どもたちに方言を使えるようになってほしいと思いますか。」という質問（Q19）に対して、結果は表9の通り、「ぜひ使えるようになってほし

表9 子どもたちに方言を使えるようになってほしいか
(琉球新報社調査 Q19) (%)

回答項目	総計 (1,137人)
ぜひ使えるようになってほしい	37.3
まあ使えるようになってほしい	44.9
あまり使えなくてもよい	11.1
まったく使えなくてもよい	2.1
分からない	4.6

表10 子供がバスク語が出来ることを望みますか
(スペイン・フランスバスク (バスク文化研究所調査 3.1.3 表10)) (%)

回答項目	
子供は既にバスク語が出来る	36
はい、子供がバスク語を出来ることを望みます	51
どちらでも構わない	8
いいえ、望みません	3
Nsp/nrp	2

い」が37.3%、「まあ使えるようになってほしい」が44.9%、「あまり使えなくてもよい」が11.1%、「まったく使えなくてもよい」2.1%、「分からない」が4.6%である。バスク文化研究所の調査では、「あなたに子供がいる、あるいはいるとしたら、子供がバスク語が出来ることを望みますか。」(Si vous avez ou aviez des enfants, voudriez-vous qu'ils sachent le basque?)という質問(3.1.3表10)に対して、表10の通り、「子供は既にバスク語が出来る」(Ils le connaissent déjà)が36%、「はい、子供がバスク語を出来ることを望みます」(Qui, je voudrais qu'ils le sachent)が51%、「どちらでも構わない」(Peu m'importe)が8%、「いいえ、望みません」(Non, je ne le voudrais pas)が3%である。

子供たちに対して、ウチナンチュもウチナーグチ(方言)の使用に関して肯定的(「ぜひ使えるようになってほしい」と「まあ使えるようになってほしい」の合計)な意見が82.2%であり、バスク(系)人の場合もバスク語の使用に関して肯定的(「子供は既にバスク語が出来る」と「はい、子供がバスク語を出来ることを望みます」の合計)な意見が87%と共に高い。多くのウチナンチュもバスク(系)人も、それぞれの言語を子供たちに使えるようになって欲しいという人が80%以上である(既に使えるというバスク(系)人の回答を含む)。

表 11 あなたは、方言をどの程度使えますか
（琉球新報社調査 Q18）（%）

回答項目	総計 (1,137人)
聞くことも話すこともできる	44.7
聞けるが話せない	26.3
ある程度聞ける	21.7
まったく聞けないし話せない	7.3

表 12 バスク語でできること
（アルゼンチン・バスク（本プロジェクト調査 2-1））

回答項目	総計 (105人) (割合%)
何もできない（無回答）	16人 (15.2)
あいさつができる	30人 (28.6)
はっきりゆっくり話してもらえれば、だいたいの意味は分かる	7人 (6.7)
自分の身の回りの状況を簡単な言葉で説明できる	23人 (21.8)
日常的な会話に、すぐに加わることができる	1人 (2.5)
ラジオやテレビ番組の要点を理解することができる	19人 (17.6)
流暢に自然に会話や議論をすることができる	9人 (8.4)

3. ウチナーグチとバスク語の能力

では、実際、どれくらいの方がウチナーグチとバスク語を使えるのだろうか。琉球新報社調査では、「あなたは、方言をどの程度つかえますか」という質問（Q18）に対して、結果は表 11 の通り、「聞くことも話すこともできる」が 44.7%、「聞けるが話せない」が 26.3%、「ある程度聞ける」が 21.7%、「まったく聞けないし話せない」が 7.3% である。本プロジェクト調査では、「あなたは、バスク語（統一バスク語・バスク方言）・英語・スペイン語・フランス語で以下①～⑥のことができますか。あなたができることがら全てにチェック（☑）を入れてください。」（¿Es capaz de desenvolverse en euskara, inglés, español o francés en las siguientes situaciones? Marque con un aspa(☑) las opciones 1 a 6 cuando corresponda en cada lengua.）という質問（2-1）に対して、バスク語（統一バスク語・バスク方言）の場合だけを取り出してみると、結果は表 12 の通り、「あいさつができる」（Puedo saludar.）が 28.6%（30 人）、「はっきりゆっくり話してもらえれば、だいたいの意味は分かる」（Entiendo algo si me hablan despacio y claro.）が 6.7%（7 人）、「自分の身の回りの状況を簡単な言葉で説明できる」（Puedo usar palabras sencillas para dar información personal básica.）が 21.9%（23 人）、「日常的な会話に、すぐに加わることができる」（Puedo participar en conversación cotidiana sin problemas.）が 1.0%（1 人）、「ラジオやテレビ番組の

要点を理解することができる」(Puedo entender las ideas principales de los programas de radio o televisión.)が18.1% (19人),「流暢に自然に会話や議論をすることができる」(Puedo conversar y debistir con soltura y naturalidad.)が8.6% (9人),「何もできない(無回答)」が15.2% (16人)である。

両方の調査の回答項目が異なっており,また沖縄でウチナーグチについて質問しているということとアルゼンチンでバスク語について質問しているという違いがあって簡単に比較は出来ないが,肯定的と考えられるであろう回答を確認すれば,ウチナーグチの場合「聞くことも話すこともできる」が44.7%おり,本プロジェクト調査では「流暢に自然に会話や議論をすることができる」が8.6%,「ラジオやテレビ番組の要点を理解することができる」が18.1%,「日常的な会話に,すぐに加わることができる」が1.0%である。

IV. 宗教的意識について

1. ウチナーンチュとバスク(系)人の宗教意識

宗教的意識とアイデンティティも強いつながりを持つことがある。ウチナーンチュとバスク(系)人との宗教意識についても,最後に触れておきたい。

沖縄の宗教(民間信仰)の特徴の一つは祖先崇拝だといわれる。琉球新報の調査でも,このことについての意識が質問(Q11)されている。琉球新報社の調査では,「沖縄の伝統的な祖先崇拝についてどう思いますか。」という質問(Q11)に対して,結果は表13の通り,「とても大切だ」が53.8%,「まあ大切だ」が38.4%,「あまり大切ではない」が2.3%,「まったく大切とは思わない」が1.1%,「分からない」が4.3%である。アルゼンチンのバスク(系)人の場合,本プロジェクト調査では,「あなたの信じている宗教はどれですか。」(¿Cuál es su religión?)という質問(6-4)に対して,「カトリック」(catolicismo)が72.4%,「プロテスタント」(protestantismo)が0.0%,「信じている宗教はない」(no tengo religión)が24.5%,「その他」(otra)が3.1%である(表14)。

バスク文化研究所の調査では,宗教についてあまり調査は行われていないが,バスク文化との関連で,バスク文化が「宗教的」(Confessionnelle)か「世俗的(宗教から独立した)」(Laique)かという質問なされている(3.1.4表3)。この質問に対して,1から5のうちどれかの数字を選ぶようになっており,1が「宗教的」,5が「世俗的」である。結果は表15の通り,回答の平均値が「3.2」であり,わずかではあるが,バスク文化は宗教的であるよりも世俗的であるという考えの人が多というものになっている(Dans une moindre mesure---ils considèrent la culture basque plus laïque que confessionnelle (p.79))。

沖縄の祖先崇拝を宗教というかどうかということは,それ自体議論の必要な事であるが,ここではそれは問わないことにしたい。その上で,沖縄の場合とアルゼンチンのバスク

表 13 沖縄の伝統的な祖先崇拝についてどう思いますか
（琉球新報社調査 Q11）（%）

（単位：%）

回答項目	総計	年齢階級					
		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
とても大切だ	53.8	42.9	48.0	55.2	49.0	56.3	71.1
まあ大切だ	38.4	45.2	42.6	41.0	44.5	36.5	21.1
あまり大切ではない	2.3	3.0	2.0	1.1	2.0	2.1	3.7
まったく大切とは思わない	1.1	1.2	1.0	0.0	1.0	1.0	2.6
分からない	4.3	7.7	6.4	2.7	3.5	4.2	1.6

注)N=1,137人

表 14 アルゼンチンのバスク（系）人の宗教
（本プロジェクト調査）

単位：人

回答項目	総計 (割合%)	年齢階級							
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
カトリック	71 (72.4)	5	6	6	15	12	19	8	2
プロテスタント	0 (0.0)	0	0	0	0	0	0	0	0
信じている宗教はない	24 (24.5)	3	5	3	4	5	4	0	0
その他	3 (3.1)	0	0	0	1	1	0	0	0

表 15 バスク文化をどのように考えますか
（スペイン・フランスバスク（バスク文化研究所 3.1.4 表 10））

回答項目	平均値	年齢階級			
		10歳-29歳	30歳-45歳	46歳-64歳	65歳以上
宗教的(1)―世俗的(5)	3.2	3.6	3.3	3.0	2.9

ク（系）人およびスペイン・フランスのバスク人の場合を比較すると、沖縄の伝統的な祖先崇拝に対して肯定的な人（「とても大切だ」と思う人と「まあ大切だ」と思う人の合計）は92.2%であり、アルゼンチンのバスク（系）の人の場合、カトリックを信じている人が72.4%であり、スペイン・フランスのバスク人の場合は、差はわずかではあるがバスク文化は宗教的であるよりも世俗的であると考えている人が多い。沖縄の伝統的な祖先崇拝に否定的な人は人（「あまり大切ではない」と「全く大切ではない」の合計）は3.4%であり、アルゼンチンのバスク（系）の人の場合「信じている宗教はない」が24.5%であり、スペイン・フランスのバスク人の場合は、差はわずかではあるがバスク文化は世俗的であるよりも宗教的であると考えている人が少ない。

2. ウチナーンチュとバスク（系）人の宗教意識の年齢階級別比較

次に、宗教意識と年齢との関係についてみてみたい。琉球新報の調査では、祖先崇拝に関する上記のQ11の回答を年齢階級別にも分析している。祖先崇拝に関して、結果は表13の通り、20代では「とても大切だ」が42.9%、「まあ大切だ」が45.2%、「あまり大切ではない」が3.0%、「全く大切とは思わない」が1.2%、「分からない」が7.7%である。30代では「とても大切だ」が48.0%、「まあ大切だ」が42.6%、「あまり大切ではない」が2.0%、「全く大切とは思わない」が1.0%、「分からない」が6.4%である。40代では「とても大切だ」が55.2%、「まあ大切だ」が41.0%、「あまり大切ではない」が1.1%、「全く大切とは思わない」が0.0%、「分からない」が2.7%である。50代では「とても大切だ」が49.0%、「まあ大切だ」が44.5%、「あまり大切ではない」が2.0%、「全く大切とは思わない」が1.0%、「分からない」が3.5%である。60代では「とても大切だ」が56.3%、「まあ大切だ」が36.5%、「あまり大切ではない」が2.1%、「全く大切とは思わない」が1.0%、「分からない」が4.2%である。70代以上では「とても大切だ」が71.1%、「まあ大切だ」が21.1%、「あまり大切ではない」が3.7%、「全く大切とは思わない」が2.6%、「分からない」が1.6%である。

ウチナーンチュの祖先崇拝に対する意識は、各世代とも肯定的な回答（「とても大切だ」と「まあ大切だ」の合計）が圧倒的である。20代で肯定的な回答をした者は88.1%で、否定的な回答をした者（「あまり大切ではない」と「全く大切とは思わない」の合計）は4.2%である。30代で肯定的な回答をした者は90.6%で、否定的な回答をした者は3.0%である。40代で肯定的な回答をした者は96.2%であり、否定的な回答をした者は1.1%である。50

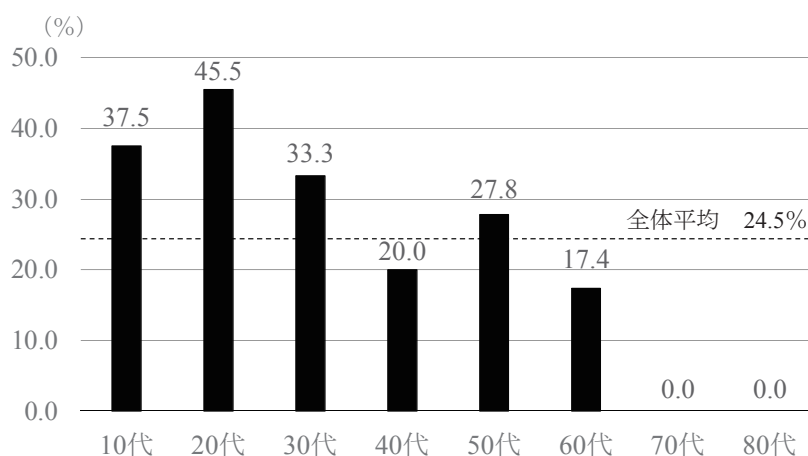


図1 アルゼンチンのバスク（系）人の無宗教率
(本プロジェクト調査)

代で肯定的な回答をした者は93.5%で、否定的な回答をした者は3.0%である。60代で肯定的な回答をした者は92.8%であり、否定的な回答をした者は3.1%である。70代以上で肯定的な回答をした者は92.2%であり、否定的な回答をした者は6.3%である。

アルゼンチンのバスク（系）人の場合、本プロジェクト調査では結果は表14の通りであり、「カトリック」を信じているものが10代で5人、20代で6人、30代で6人、40代で15人、50代で12人、60代で19人、70代で8人、80代で2人である。「プロテスタント」を信じている者は、どの年代においても0人である。「信じている宗教はない」は、10代で3人、20代で5人、30代で3人、40代で4人、50代で5人、60代で4人、70代で0人、80代で0人である。「その他」は2人である。

この調査結果から「無宗教率⁸⁾」を求めると24.5%である。すなわち、ほぼ4人に1人は信じている宗教を持っていない。これを年齢階級別に表した図1で見ると、20代が45.5%と一番高く、半数近くの者が信じている宗教を持っていない。次に10代が37.5%と二番目に高く、30代が33.3%で三番目である。四番目は50代で27.8%、五番目は40代で20.0%、六番目は60代で17.4%、70代と80代では0.0%で回答した10人全員がカトリックの信者である。10代が20代よりも割合が低くなっており、また50代が40代より高くなってはいるが、全体的な傾向としては若い世代ほど信じている宗教を持たず、宗教離れが起きているということが窺える。ちなみに、階級区分を集約して見ると、10代から20代では無宗教率は42.1%であり、30代から40代では24.1%、50代から60代では22.0%、70代以上では0.0%であり、この傾向は顕著に見て取れる。

バスク文化研究所の調査においても、バスク文化が「宗教的」か「世俗的（宗教から独立した）」かという質問に対して年齢階級別の分析がなされている。結果は表15の通りで、16歳から29歳では3.6、30歳から45歳では3.3、46歳から64歳では3.0、65歳以上では2.9である。

スペイン・フランスのバスク人の場合は、46歳から64歳が3.0で1から5の間であり、「宗教的」(Confessionnelle)と「世俗的（宗教から独立した）」(Laique)がちょうど半々である。この年齢層を境に65歳以上では2.9と「宗教的」がわずかではあるが多く、逆に16歳から29歳では3.6、30歳から45歳では3.3となっており、若い世代ほど宗教離れが起きているということが窺える。

V. 考察

以上、ウチナーンチュとバスク人のアイデンティティ意識について、「Ⅱ．ウチナーンチュあるいはバスク（系）人であるという意識について」、「Ⅲ．ウチナーグチあるいはバスク語に対する意識について」、「Ⅳ．宗教的意識」の観点から、アンケート調査の結果を

確認した。ここで、アイデンティティ意識との関連で以上の結果について若干の考察を加えたい。

「Ⅱ」でみたように、ウチナーンチュあるいはバスク（系）人であることに対して、「誇りに思う」人の割合がウチナーンチュでは89.3%であり、バスク（系）の人の場合には96.1%と共に高い。ウチナーンチュもバスク（系）人も、自分がウチナーンチュあるいはバスク（系）人であるということに誇りを持っている人が多数を占めており、共にウチナーンチュあるいはバスク（系）人であるというアイデンティティ意識は強い。沖縄あるいはバスクの文化、芸能、スポーツ等に関しても、「誇りに思う」という人が、ウチナーンチュの場合94.1%であり、バスク（系）人の場合も98.1%であり、共にかなり高い。共にそれぞれの文化、芸能、スポーツがアイデンティティ意識と関連して強めていることが窺える。ウチナーンチュであるための要件については、これからさらに議論が必要であるように思われるが、バスク人であることの要件を参考に考えれば、「ウチナーンチュでありたい（ある）と思うこと」に収斂していく可能性もあるように思われる。

ウチナーグチあるいはバスク語に対する思いも、ウチナーンチュの場合もアルゼンチンのバスク（系）人の場合も、「愛着がある」がそれぞれ88.4%と90.3%であり、共にかなり高い。また、それぞれの言語の継承に関しても、子供達にそれぞれの言語を使えるようになって欲しいという意見が、ウチナーンチュの場合82.2%、バスク（系）人の場合87%で、共に高い。また、本プロジェクトの調査で「統一バスク語の導入は、バスクの言語や文化、アイデンティティを継承するのに効果的であった。」(Q3-4)かという質問項目に対して、0（全く思わない）から10（強くそう思う）の尺度のうち8（15.0%）、9（13.0%）、10（57.0%）を選んだ人の合計が84.1%と高い。しかし、既に見た「あなたが考えるバスク人の要件とは何ですか。」（本プロジェクト調査4-1）では、「バスク語を理解すること」は重み付けで見ると54にすぎず、7つの要件の内5位である。また、バスク文化研究所の調査でも（3.1.2, 表5）「バスク語を話すこと」（Parler basque）は17%で4位である。以上のことからすると、言語はアイデンティティの形成（維持・強化）にとって重要であるが、必須ではないということになるかもしれない。これはIで見たように、バスク（系）人の要件としては、バスク語が話せる（理解できる）ということよりも、結局「バスク人である（ある）と思うこと」が重視されているということとも関連しているかもしれない。言語の能力とアイデンティティについては、さらに検討が必要である。

宗教的意識とアイデンティティについては、ウチナーンチュの場合伝統的な祖先崇拝について肯定的な人の割合が92.2%であり、アルゼンチンのバスク（系）の人の場合、カトリックを信じている人が72.4%である。ウチナーンチュの場合、伝統的な祖先崇拝に否定的な人は3.4%であるが、バスク（系）人の場合「信じている宗教はない」が24.5%である。

バスク文化研究所の調査でも（本稿表 15）、バスク文化はあまり大きな差ではないが宗教的（Confessionnelle）であるよりは多少世俗的（Laïque）である。しかし、1859 年にサビノ・アラナを中心に結成されたバスク・ナショナリスト党の標語は「神と旧法」であった（『現代バスクを知るための 50 章』 p.201）。「神」はもちろんキリスト教であり、カトリックを意味していた。カトリックであることはバスク人にとって伝統的には大きな意味を持ってきたと言えよう⁷⁾。

しかし、以上の検討結果からすれば、現在では無宗教のバスク人が、特に若者を中心に増えてきているということが示されている。確認すると、アルゼンチンのバスク（系）人の場合（本プロジェクト調査）においても「信じている宗教はない」と回答した者が 20 代では 45.5% で半数近くの者が無宗教であり、10 代では 37.5%、30 代では 33.3% で、両世代において 3 分の 1 以上の者が無宗教、50 代でも 27.8% と 4 分の 1 以上の者、40 代においても 20.0% で 5 分の 1 の者が無宗教である。スペイン・フランスのバスク人の場合（バスク文化研究所調査）でも、46 歳から 64 歳が 3.0 で 1 から 5 の中間であり、「宗教的」（Confessionnelle）と「世俗的（宗教から独立した）」（Laïque）がちょうど半々であるが、この年齢層を境に 65 歳以上では 2.9 と「宗教的」がわずかではあるが多く、逆に 16 歳から 29 歳では 3.6、30 歳から 45 歳では 3.3 となっており、若い世代ほど宗教離れが起きているということが窺える。

上で述べたように沖縄の祖先崇拝とカトリックへの信仰を単純に比較する事は出来ないが、沖縄では伝統的な祖先崇拝が依然として重視されているのに対して、バスク（系）の人々の間では多少カトリックへの信仰が薄らいできていると言えるのかもしれない。しかし、この点についても、さらなる慎重な検討が必要であるように思われる。

付記

本稿は、2015（平成 27）年度琉球大学中期計画達成プロジェクト（戦略的推進経費）「文化共有集団による越境的ネットワークの国際比較研究——ウチナーンチュとバスク人をめぐって——」（研究代表者：金城宏幸琉球大学教授）に基づく研究成果の一部である。本プロジェクトのメンバーからは、（現地調査に参加できなかった筆者に対して）アルゼンチンのバスク（系）の人々に対するアンケート調査の結果を提供して頂き、使用させて頂いた。特に、宮内久光教授には単純集計結果の提供や重み付けの取り扱い等いろいろお世話になった。記して感謝します。

注

1) 平成 27 年度中期計画達成プロジェクト経費によるアルゼンチンのバスク（系）人の調

査については、「移民研究」本号の「バスク系アルゼンチン人のバスクに対する意識」(pp.115～144)参照。

- 2) 「沖縄県民意識調査2011」, 琉球新報社, 2012年4月29日。
- 3) *Identité et culture basques au début du XXIème siècle*, 2007, Institut culturel basque. (<http://www.euskomedia.org/PDFAnlt/mono/ident/fr/ident.pdf>) この調査は, アラバ, ビスカイア, ギプスコア, ナファロアのスペイン領のバスク4県と, ラプルディ, 低ナファロア, スベロアのフランス領の3つの地域(表記は『現代バスクを知るための50章』による)の約4,000人を対象とするものである。
- 4) その意味では, アルゼンチンのバスク(系)人と海外のウチナーンチュ(沖縄県(系)人)の比較が必要である。
- 5) 『問われる沖縄アイデンティティとは何か』(沖縄国際大学沖縄法制研究所編 沖縄タイムス社, 2015年)に, 次のような発言があり, 「バスク地方(国)の支持者(防御者)であること」と合い通じるものであるように思われる。「アイデンティティという言葉は, 自己認識とかいろいろな解釈があると思いますが, 私の場合, ひと言でいうと, 「シマ(故郷)を守る意識があるか」だと思います。」(pp.87-89)。
- 6) 萩尾 生・吉田浩美編著, 『現代バスクを知るための50章』, 明石書店, 2012年。
- 7) キリスト教が入ってくる以前のバスク人のもともとの宗教は, 自然崇拜(太陽, 月, 星や雨, 雷, 光, 風等)であり, これらに「人格化された精霊たち」が宿るとするのであり, その中でも全ての精霊の女主人マリ(Mari)が最も知られていたと言われていいる(『バスクとバスク人』渡辺哲郎, 平凡社, 2004年)。Orhipeanも, 「マリは最もよく知られ最も力のあるもの〔神話のキャラクター〕である。マリは一般的に全ての神話上の存在の内の最高の存在であり母であると考えられており, しばしばdamaつまりレディーとも呼ばれている。」(Mari is one of the most well known and the most powerful. Mari is generally held to be the supreme being or mother of all mythological being and is also called dama or Lady.) (Xamar, *The Country of Basque*, Pamiela, 3rd edition 2012)と述べている。渡辺は, 「バスクの古代信仰は現代においても民間信仰として息づき, 生活感覚, 意識の一部を形成している。」(前掲書p.47)と述べている。たとえば, それは夏至に行われる火祭り(聖ヨハネの祝日の前夜)であろう(『現代バスクを知るための50章』pp.245～246)。しかし, 本稿ではこの点までは調べることはできなかった。他日を期したい。
- 8) 「無宗教率」は, 「信じている宗教はない」の回答数を「カトリック」+「プロテスタント」+「信じている宗教はない」の回答数で割って求めた。

(はまさき もりやす・琉球大学法文学部教授・倫理学)